

會學濟經學大國帝都京

叢論經濟

號四第 卷二十四第

行發日一月四年一十和昭

論叢

ナイトの利子理論

文學博士 高田保馬

學校と課税

法學博士 神戸正雄

貿易構成の變化

經濟學博士 谷口吉彦

時論

税制改革の具體案

經濟學博士 沙見三郎

我が國特有の社會問題としての融和問題

法學博士 山本美越乃

研究

フランスに於ける通貨構成變動の意義

經濟學士 松岡孝兒

價格構成に於ける商業の作用

經濟學士 堀新一

クニースの價值論

經濟學士 出口勇藏

說苑

再保險の損害率について

經濟學士 佐波宣平

賣上税の一側面

經濟學士 柏井象雄

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

クニースの價值論

出口勇藏

一、緒言

カール・クニースは彼の「國民經濟學」第一版¹⁾を公けにした翌々年、「國民經濟的價值論」(Die nationalökonomische Lehre vom Werth)を發表した²⁾。我々は先に彼の國民經濟學の一般的概念を既括的に検討するところがあつたが、以下に於てそれが價值論に於て如何に具體化されて我々に示されるかを吟味するであらう。彼はこの論文を「價值論は國民經濟學に對して基本的な意義を持つてゐる³⁾」と云ふことを以て初めてゐる。我々が彼の價值論を吟味することは、やがて彼の國民經濟學の理念の經濟學理論への具體化の基本的問題を探ねることを意味するであらう。而してこゝで問題とされるのは、「國民經濟的價值論」に於て見られる彼の國民經濟の規定と、價值論一般の研究方法に關してである。

二、「國民經濟的價值論」の概要

- 1) Die politische Oekonomie von Standpunkte der geschichtlichen Methode 1853.
- 2) K. Knies, Die nationalökonomische Lehre vom Werth. in Zeitschr. f. d. ges. Staatsw. 1885 SS. 421-472. 尙 SS. 645-648 に「價值論補遺」(Nachtrag zu der Lehre vom Werth)がある。
- 3) 拙稿「カール・クニースの國民經濟學」(本誌第四十一卷第三號)
- 4) Knies, cit. op. S. 421.

先づクニースの論するところを要約しやう。

價值は高さと云ふと同じく量的關係に關する相對的概念であるから、質的規定と量的規定とを持ち、價值理論は兩者を結合するところに成立する。「財の生産及び消費一般の科學が又兩概念の總括に基づく」と云ふことは、決定的な意義を持つてゐる。「彼は質的規定から初め、然る後量的規定を説く。而して價值規定は、欲望と對象との二側面からなされる。先づ欲望の側から價值は規定されねばならぬ。何故なら「價值とは對象が人間の欲望の満足的手段として持つてゐるかの有用性の度合である」¹⁾からである。我々はこゝに彼の主觀價值説の端的な表白を見ることが出来る。使用價值と交換價值とは財の有用性の二種である。²⁾使用價值は普通に云はれる様に——ラウ・ロツシャー——有用性の外に、「所有者自身に對し、所有者の自己適用に際して」³⁾表はれると云ふ限定を設けることが必要である。使用價值とは、財が所有者に對し、所有者の自己適用に際して表はす有用性に外ならぬ。かく質的規定を與へて彼は使用價值の量的規定へと向ふ。使用價值の大小は、(一)欲望の強度 (Intensivität des menschliches Bedürfnisses, welches die Güter befriedigen) と(二)欲望満足の強度 (Intensivität, in welcher die Güter ein menschliches Bedürfnis befriedigen) とによつて定まる。(一)欲望の強度は財の類例⁴⁾へば衣服・食料品・燃料等々に對して表はれ、これより生ずる使用價值は、類使用價值 (Gattungs-Gebrauchswert) である。(二)欲望満足の強度は、同一類例へば燃料に屬する諸種^{スベキエス}の財、松・ブナ・榊等々に對して異なるものとして表はれ、

1) ibid. S. 424.
2) S. 428.
3) ebenda
4) S. 429.

これより生ずる使用價值が種使用價值 (Species-Gebrauchswert) である。(一)及び(二)には欲望が個人間に普及し、個人に切迫せるものとなればなる程、各々「欲望の分類・段階」が生じ、これに應じて類使用價值及び種使用價值に段階が^{スカラー}成立する。さて交換價值は使用價值に基き財の所有への欲望に對して表はれ、使用價值と矛盾することなく調和を保つものであるが、これに特殊的なものが生ずるのは、財の使用のみならず又讓後 (Uebertagung) が問題だからである。「財一般の交換價值は、その使用價值が大であればある程それだけ、又その讓後——交換業務——が容易であればある程それだけ大である。」¹⁾かくて交換價值の大きさの決定要素には、使用價值の大きさ決定の上述の二要素の外に、讓後の難易、即ち「財の運搬可能性 (Transitfähigkeit)」が入る。そして交換價值にも亦類交換價值 (Gattungs-Tauschwert) と種交換價值 (Species-Tauschwert) とが區別せられるが、その際第三要素たる「財の運搬可能性」は獨立して兩者に作用する。²⁾かく使用價值と交換價值とを特徴づけた後、クニースは之を抽象的價值となし、別に具體的價值なるものを説いてゐる。

「國民經濟學は二つの價值(即ち抽象的なる使用及び交換價值——出口)に於て、只一つの出發點、只一つの橋渡しを持ちえて得るところが多いと云ふことは確實である。國民經濟學は普遍人間の欲望にその注意を向けねばならぬことは云ふまでもない。けれどもそれはその考察の個有の對象即ち國民に對する・從つて人間の欲望の一定數と一定度とを持つた一定數の人間に對する・基礎をそれで得んがため、又その限りに於てのみである。國民經濟學は又人間の欲望の満足に對する財の普遍的價值を勿論考慮せねばならぬ。だがそれは國民の處理に委せられてゐる一定數の財の一定數量の價值の認識に對する基礎を得んがため、又その限りに於てのみである。」³⁾

1) SS. 429-431.
2) S. 435.
3) S. 433.
4) SS. 435-437.
5) S. 439.

普遍人間の欲望に對する財の普遍的價值が云ふところの抽象的價值であり、國民の欲望に對する國民の財の價值が具體的價值と稱せられる。何が故に後者は具體的であるか。價值が前者に於ては人間の欲望一般と財一般との關係に於て見られたに反して、後者では一定數量の欲望と一定數量の財との關係に於て見られてゐるからである。クニースは具體的價值を更に私經濟的、具體的價值と國民經濟的、具體的價值とに分けんと試みる。彼はラウ (W. H. Rau) の具體的價值(後述)を私經濟的具體的價值であるとして、説くに詳細ではないが、區別の根據は次の如くである。

「國民經濟は私經濟より組成されており、前者と後者との利益は極めて多様な仕方であつてゐるのであるが、熟知されてゐる通り、私經濟に對してのみ妥當する命題と國民經濟に對してのみ妥當する命題との多くのものが立てられ¹⁾る。」

即ち私經濟的、具體的價值とは、私經濟に於ける一定數量の欲望と一定數量の財との關係に於て表はれる具體的價值である。反之、國民經濟學の對象たる國民經濟は、地理的・氣候的に限定された關係の中に生活する國民の統一的生活態である、故に國民經濟學で取扱はれる價值も亦普遍人間の欲望に對應する價值ではなく、具體的な・地理的に限定せられた國民的欲望に對應する價值でなければならぬ。例へば寒帶國民に於ける燃料の具體的價值は、熱帶國民に於けるよりもより大であり、小麥の具體的價值は、米食國民にあつてはヨリ低く評價せられる。又國民が生産せぬ對象の價值は、その國民にあつては成立しない。この事態は國民なる概念の本質に屬する。²⁾故に國民經濟學に於て論ぜらるべき國民經濟的具體的價值は、各國民の種類と強度とによつて構

1) SS. 460-461.

2) SS. 440-441.

成される欲望の一定數量とこの欲望を満足させるために國民の處理に委せられる財の全貯藏量 (Gesamtvorrath) によつて形成せられる。¹⁾——具體的價值に於ても使用價值と交換價值とが區分せられることは云ふまでもない。具體的使用價值は、使用に對する欲望の限度までの財に就て生じ、それを越える財の部分は交換價值の擔ひ手となる。²⁾兩者を限界づけるものは、私經濟にあつては個人の使用に對する欲望、國民經濟にあつては國民の使用に對する欲望である。

以上欲望——使用目的——の側より價值を規定・分類するクニースは、一轉して「我々が財に就て云ひうるためには、人間の欲望とそれを満足せしむる對象とが現存してゐることが必要である³⁾」とて、全然別個の對象の屬性の差異よりの價值の規定・分類を初め、三つのものを數へる。

一 素材價值 (Stoffwerth) —— 素材價值は物體の物理的・化學的屬性に基づき、人間の欲望が素材により、素材として満足せられるや否や、又その限りに於て問題となる。素材の硬軟・弾力・膨張力・營養力・酸化力等々が之に數へられ、自然科學の經濟學に對する特別な意義はこゝに存在する。二 形相價值 (Formwerth) —— 形相價值は目的との關係に於ける對象の形態ゲシュタルトウングに基づく。素材價值とは無關係に、對象の大小・恰好・使ひやすさ・美しさ等々要之對象の形態に就て云はれるすべての特徴の價值である。新しく機械が發明される時、形相價值は以前のものよりヨリ高いと云はれる。三 場所價值 (Ortswerth) —— 場所價值は欲望の存在する場所と對象の存在する場所とに依存する。地方的な欲望が地方的な對象に關係する時、場所價值は大となり小となる。原始林の木

1) SS. 441-442.

2) 具體的使用價值が使用に對する欲望の限度までの財に就て生ずるのは、使用に對する欲望が常に一定數の財に對する欲望であるからである。SS. 465-466.

3) S. 467.

材・水源地の飲用水は、欲望の存しない所では價值を持たないが、欲望ある所に移される時、場所價值を生ずる¹⁾。此等の三分類の正當なることは、原始産業・工業・商業がこの各々の價值を到達^{エルツァーレン}するのであることによつて裏書きされると述べて²⁾クニースはこの論文をとじてゐる。

三、抽象的價值・私經濟的具體的價值・國民經濟的具體的價值

上に概説するクニースの價值論より、我々は二つの問題を取上げる。その一は抽象的價值・私經濟的具體的價值・國民經濟的具體的價值の區別及びその關係に就て論ぜられるところより見らるる彼の國民經濟の規定に就てある。

抽象的價值と具體的價值との區別は、既にラウが與へたところである。彼は「國民經濟學原論」(Grundsätze der Volkswirtschaftslehre)の中で、抽象的價值は「財に對する人間一般の態度」に基づいて生じ、具體的價值とは「財の所與の(具體的)數量を、特殊個人の欲望及び所有狀態に關して觀察する」時に生ずるとなす³⁾。抽象的價值が欲望一般と財一般とに係はるに對し、具體的價值は個人の欲望と彼の「處理に委せられる」財とに係はる。従つて之は本質的に個人的、即ち現實的には市民的・私經濟的である。そこでクニースはラウの云ふところは私經濟的具體的價值であつて、國民經濟的具體的價值ではない、國民經濟が私經濟より區別さるべき様に價值にも又この區別がなければならぬ、と考へる。彼の國民經濟的具體的價值は、この私經濟的具體的價值が個人の欲

1) SS. 468-472.

2) SS. 473-475.

3) K. H. Rau; Lehrbuch der politischen Oekonomie Erster Band Grundsätze der Volkswirtschaftslehre § 62.

望と個人の所有する財とに係はるに對して、國民の全欲望と國民の所有する財の全貯藏量とに係はるものでなければならぬ。この區別を發見した彼が、國民經濟的具體的價值に就てかく抽象的な規定を與へることは容易であるが、現實に此の區別は如何に現はれるであらうか。彼はそこで自ら、國民の各個人に歸着する國民經濟的具體的價值の部分が個人の私經濟的具體的價值と一致するであらうかと問ひ、且答へる。之が然りと云へるのは「只各人が全量の中同一の分割部分に對する等しい大いさの欲望を持ち、何人も他人よりヨリ多くの部分を利用する機會を持たぬ場合」に限り、現實的には兩者には差異あり、又屢々非常に大であると。何故なら「國民の所有にある財の私經濟的價值は、一般に、常に之を消費する集團クライヒに對してのみ表はれる」のであるから。即ちクニースクニースに於ても、國民經濟的具體的價值は嚴密には現實に存在してゐないのである。我々が二つの具體的價值に就て吟味を加へるには、その地盤である私經濟と國民經濟とを分析しなければならぬ。こゝに私經濟とは原始共同體の中に無自覺的・本能的に生活せる人間が個人として分裂した市民的私經濟を意味すること疑ひない。又國民經濟とクニースが云ふ時、産業資本主義の確立時代に於けるドイツの國民經濟即ち、後進資本主義國のドイツが内部の市民社會の發展に於て取るところの外廓としての國民經濟を指せるものに外ならない。「國民經濟は私經濟より組成せられる」のである。この國民經濟に於て、彼が表象したが如き國民經濟的具體的價值は實存するであらうか。又彼自らも認めたと如くに嚴密には實存せぬとすればそれは何に基づくであらう

- 1) S. 463.
- 2) ebenda こゝに集團と云つてゐるものはクニースが他のところで「國民層」(Volksschichten)と云ふものに等しい。即ち私經濟的具體的價值は、階級的にのみ表はれるのである。S. 441.
- 3) 前出

か。私經濟に於て具體的使用價值が、個人の「自己欲望」に對する限りの財に成立すること、クニースが説くが如くである。けれどもその超加分の財に就てはすべて交換價值が生じ、交換價值獲得の欲望、即ち財の所有^{ベジツツ}への欲望は決して有限ではない。又市民社會に於ては、この二つの價值に對する欲望は貨幣的表現を取り、欲望は貨幣に裏づけられて需要となり、交換價值の一般的擔ひ手たる貨幣の獲得・追求、資本の増殖は、市民的私經濟をして銳意活動せしむる唯一の契機である。その結果國民内部に欲望を貨幣によつて表現しうる階級と表現し能はざる階級とに分裂する。國民の全需要としての國民の全欲望には階級的制約が不可分離であり、階級（國民層）に於ては一定數量として把へられやうが、それは階級を越えたる國民の全欲望を示すものではない。故に市民的國民經濟に於ては國民の全欲望なるものは現實に存在しないのである。そしてクニースが之を承認せざるを得なかつた時、彼は市民的國民經濟の本質を無意識的に把えてゐたのである。

次に我々は國民經濟的具體的價值の他の一つの前提たる一定の「財の全貯藏量」の吟味に入らう。クニースは欲望の側より價值を考へる時、常に欲望に對して財が「處理に委せられる」(Zur Disposition stehen)ことを既定の事實とする。この前提そのものゝ檢討は我々の次の問題である、こゝでは之を承認して、市民的國民經濟に於て「財の全貯藏量」が一定たりうるかを見やう。我々は全欲望が市民的國民經濟に於て實現せぬと同様、財の全貯藏量も一定たりえないと答へる。何となれば——市民的私經濟より組成せられる市民的國民經濟に於ては、財は貨幣に對してのみ

門戸を開く供給の形態で國民經濟に推積し、供給が貨幣資本の獲得・追求のために起る限り、それによつて規定される。國民經濟には、財が國民の欲望に應じて「處理に委せられる」のではなく、之を無視し、營利を目的として、階級的に、及び市民的世界經濟に向つて「商品の集大成」として生産せられる。故に財の全貯藏量は市民的國民經濟に於ては一定量として表はれえない。

國民の全欲望及び國民が所有する財の全貯藏量は市民的國民經濟に於て實存しない、故に國民經濟的具體的價值はそこには現實的となる筈はない。存在するものは只私經濟的具體的價值とその競合とのみである。クニースがラウの具體的價值を私經濟的具體的價值と呼び、且つ國民經濟學に於ては之と區別さるべき國民經濟的具體的價值が考察さるべきことに思ひ至つたことは正當である。而も彼が之が市民的國民經濟に於て現存するか如くに説かんとするところに批判さるべき重大なる誤謬がある。我々は先に彼の國民經濟の規定が有機體的であること、部分を全體の中に肯定的・保存的に攝取せんとしてゐることを見た¹⁾。價值論を通して窺はれる彼の國民經濟の規定に於ても、私經濟を肯定的・保存的に國民經濟の全體の中に部分として含ましめ、その間に調和が生じて國民經濟の具體相を呈示するとなす點に於て、この特色が表はれてゐる。而も我々が見た如く、彼は自己の立場を現實には否定してゐることは、有機體説の抽象性を自ら暴露してゐるものと云はなくてはならぬ。彼も亦國民經濟的具體的價值の個人に歸着する部分が、私經濟的具體的價值と一致しうる場合を考へんとする。かゝる状態は明かに市民的國民經濟ではない、個

1) 前掲、拙稿参照。

人が市民的自由活動を奪はれ、市民的國民經濟が否定せられ、それによつて個人が國民的自由を獲得し、國民主義的國民經濟を實現する時にのみ、それは可能であらう。だが同時に國民經濟的具體的價值は私經濟的具體的價值を通過してのみ可能となることが忘らるべきではない。國民が國民として自覺し、世界的聯關に於て矛盾なく存在しうるは、市民的個人となつて自意識を持ち、同時に世界的(人類的)聯關に入るの資格と責任能力とを持つことによつてのみであり、國民的欲望が自覺されて表はれるのは市民的個人の欲望の自覺を通過して初めて可能だからである。

我々は更に三つの價值即ち抽象的價值・私經濟的具體的價值・國民經濟的具體的價值の關係を考へる。一般に經濟價值意識は、人類社會の原始段階たる原始共同體に於ける無自覺な共同經濟生活個人の分裂によりて消滅し、個人的に意識せられて人間に對自的となる。之私經濟的具體的價值である。クニースが私經濟的具體的價值を説く以前に述べる抽象的價值は、實は之者として意識される個人の經濟價值意識を普遍化せる抽象物に外ならず、かゝる抽象物を先行せしむることとは啓蒙思想に基づくと云ふべきである。我々はクニースの抽象的價值を原始共同體の共同經濟に於ける無自覺的價值感情と解し直すことが出来る。之は共同的従つて平均的なる價值感情である。このものが共同體より分裂する個人により崩壊し、個人の一定の欲望に對する財の關係に於て意識せられる價值が私經濟的具體的價值に外ならない。個人の一定の欲望に對するが故にこの價值は限界的であり、使用價值と交換價值とは限界づけられ相互外在の關係に立つ¹⁾。第三の國民

1) 私經濟價的具體的價值が個人の欲望を限界として、使用價值と交換價值とに分たれることは既にのべた如くである。而してこれに交換の行はるべき所以がある。

經濟的具體的價值は、國民經濟が私經濟より組成せらるゝのでない如く私經濟的具體的價值より組成せられず、私經濟が更に否定せられて個人が國民共同體の成員となる時に、個人的欲望と個人的意識に對する價值意識ではなく國民の全欲望と國民的意識に對する價值意識に於て出現する。即ち先の原始共同體の價值感情が自覺的に自己を取りかへすことによつて價值は限界性を通過したる平均性を擔ふ。而もその平均性は私經濟的價值意識に於て發展を遂げたる萬民的媒介を經たる國民的價值意識なるが故に、價值は單に一共同體に於ける平均性ではなく世界的なる平均性を分有する。我々は私經濟的具體的價值をクニースと共に解し、抽象的價值と國民經濟的具體的價值とを右の如くに解し直す時、三つの關係は人類經濟生活に於ける價值感情の辨證法的發展段階として歴史的にも理論的にも意義あるものとなるであらう。我々はクニースの所論を無意義であると思ふものではない。彼が産業資本勃興のドイツに於て國民經濟的具體的價值を表象したことを、むしろ偉業なりとする。只市民的國民經濟の真相に徹せず、之を有機體說的に説かんとせるところに、ドイツ産業資本のイデオログたる名稱を與へられる所以を理解するのである。

四、クニースの主觀價值說に就て

今まで我々はクニースの主觀價值說に従ひ、欲望の側よりの價值規定内部に於て吟味を加へた、財及びその數量が問題となる場合にも「處理に委せられる」財を、彼に従つて假定した。が我々の

第二の問題はこの前提そのもの、即ち價值論の方法論上の意義に係はる。財が人間の處理に委せられるのは如何にして可能であるか。我々は只生産されることのみによつてあると答へる。然るにクニースは此事實を前提した、即ち彼は價值論を説くに財の生産自體を反省の對象としなかつたのである。我々は彼が「國民經濟學」に於て、經濟行爲の技術的現定として生産・分配・消費を數へたことを知つてゐるが、價值論に於て反省された事態は「交換と消費」であつた。之は市民的經濟學の價值論の一方に外ならず、彼が理念として掲げた國民經濟學の價值論たるべき方法に背馳するであらう。彼が價值を欲望の側より規定した後、對象の側からも試みてゐることは既に見たところである。が之は上の我々の斷定を覆へすに足るものであらうか。彼の第二の價值規定は對象の屬性の差異によつてなされてゐる。しかしこれは明かに彼が「國民經濟學」に於て「政治經濟學の字義より判明する意義深き諸目標」の命題に矛盾する。彼はそこで政治經濟學は人間的目的・人間的行爲・人間的課題を取扱ふのであつて、技術の問題そのものは之に屬さない由を明言する。而して正に第二の價值規定は、そこに排斥されてゐる當のことをなしてゐるのである。

先づ素材價值は對象の自然科学的屬性に關し、自然科学と交渉する部門に於て表はれる。之は技術内部に於て考察する價值であつて經濟學的價值ではない。次に形相價值は物の形態に係はる。形態は自然的なるものと人爲的なるものとに分ちうるであらう。前者は素材と不可分離であり、共に技術上の價值に外ならず、後者は對象の屬性に關するのではなく、かく形態づける人間の行

1) 前掲、拙稿參照。

2) 前掲、拙稿參照。

爲によつて媒介さるゝ人間の頭惱の内にある形相に關はる¹⁾。故に之も亦技術學によつて獲得されたる人間の表象の價值であつて、物の屬性とは獨立してゐる。第三に場所價值は對象の存在する場所と欲望の空間性に基つくとクニースは云ひ、水質改良の發明と部屋に置かれた水差の水とを例證する。水質改良の發明は云ふまでもなく技術の問題である。而して水差の水の場所價值を説くにあたつて彼は自らの誤謬を暴露してゐる。曰く、水差の水が場所價值を有するは、「召使の勞賃の一部を以て支拂はられたのであるから²⁾」と。場所價值は對象の屬性と欲望の空間性とに基づくのではなく、對象を移動せしむる人間の勞働と欲望の空間性とに依存するのである。要之クニースの對象よりの價值規定は、我々の上の斷定を覆へすに足るものではなく、彼自らが政治經濟學の考察域より排斥してゐる「技術の問題そのもの」よりなされてゐるのである。而してこれらの三價値の到達に與るものとしての三産業部門の指摘は、經濟學的意義を把えたものではない。價值論として抽象化される現實の事態は人間の經濟行爲の全體でなければならぬ。クニースは之より「交換と消費」のみを抽象して主觀價值説を説くが、具體的なる價值論は生産行爲そのものをも同時に考察しなければならぬ。生産行爲とは人間が一定の技術段階に於て獲得した形相^{フォルム}を、同様に技術によつて規定された生産手段(動力因)によつて、對象(質料因)に働きかけ、生活(目的因)のために生産物として産出することを意味する。この際經濟學に於て問題とすべきはその生産行爲爲自體(Formulierung)即ち勞働そのものである。勞働そのものゝ價值を價值論に取り入れて論ずる

- 1) アリストテレスが making に就て論ずるところを參看せられたい。(石川博士「精神科學的經濟學の基礎問題」pp. 82, 83 參照) 對象の屬性とは matter の屬性であつて、form ではない。
- 2) Knes, cit. op. S. 472.

時、財及びその數量がクニースに於けるが如く「處理に委せられる」として前提せられるのではなく、價值論が具體的に抽象せられるであらう。加之勞働に於て、生産に於ける技術と實踐とが結び付き、經濟價值と倫理價值との密接なる根本的關係が真相を表はすのである。彼は交換價值の使用價值より區別さるべき所以を運搬可能性に求める。之は明らかに場所價值と密接なる關係を持ち、場所價值は經濟學的には勞働價值に外ならなかつた。即ち交換價值の實體は勞働價值に外ならず、交換價值なる名稱は交換が支配的である市民社會に於ける勞働價值の現象形態なのである。勞働價值を主として論ずる價值論は客觀價值説である。クニースは財の生産を前提して價值を論じた、即ち客觀價值説を前提して主觀價值説を唱えた。このことは欲望による價值規定が勞働による價值規定によつて媒介されずしては、主觀價值説が客觀價值説によつて媒介されずしては、具體的價值となり、具體的なる價值理論となりえないことを證明するものである¹⁾。思ふに欲望と勞働とは相互否定的に媒介し合つて經濟行爲となる。故に經濟行爲の抽象化として表はれる價值論は二つの價值理論の相互否定的な統一でなければならぬ。市民社會従つて市民的國民經濟に於ては、欲望と勞働とが個人的・社會的に分裂する。この時に主觀價值論を唱えるクニースを我々が市民的經濟學者と呼ぶ時、その明白な特徴を把へてゐるであらう。けれどもだからと云つて、三に分析された價值の三區分は無意義なものでないことに注意しなければならぬ。我々の批判的理解は著者の所説を著者の意圖を越え我々に對する意義に於て把握するものだからである。

1) クニースが對象の側より價值規定をなす時、經濟學的には、我々が見たが如く、勞働價值を論ずるのでなければならなかつた。